

風のように

甘木教会



主任牧師：白川道生

牧会委嘱牧師：竹田孝一

コヘレトは言う。なんという空しさ なんという空しさ、
すべては空しい。 コヘレト 1:2

どんな貪欲にも注意を払い、用心しなさい。有り余るほど物
を持っていても、人の命は財産によってどうすることもできな
いからである。 ルカ 12:15

自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者はこ
のとおりだ。 ルカ 12:21

【説教要旨】

年齢を重ねると昔を振り返る癖がついてきます。「昔は良かった
と言うな」とコヘレトは言います。そして、わたしは太陽の
下に起こることをすべて見極めたが、見よ、どれもみな空し
く、風を追うようなことであった。コヘレト 1:14

まことに、人間が太陽の下で心の苦しみに耐え、労苦してみても
何になろう。一生、人の務めは痛みと悩み。夜も心は休まら
ない。これまた、実に空しいことだ。コヘレト 2:22-23

「なんという空しさ なんという空しさ、すべては空しい。」
と言うのです。すべてが空しいものなのです。コヘレトの言葉
に抗えないものを感じつつ、しかし、何のために私の人生はあ
るのかと問いたくなります。

神学校を卒業したばかりの初任地の教会の教会は、牧師を呼
ぶには経済的に無理だったのですが、「不足するなら自分が出す」
と言って、牧師をどうしても呼びたいとシズ子先生でした。ど
うして、シズ子先生はここまで言い張ったのか。名門、九州女
学院の先生をしていた彼女は、終戦間もないとき、伯父を訪ね
て別府駅をおりると温泉地に生きる糧を求めてたどり着いた孤

児がいました。熊本に帰ったシズ子先生は、モード・パウラスの許に行きます。「シズ子は顔を輝かせながら、わたしの事務所へきた。伯父が、別府で孤児の家を始めるために、土地と家を慈愛園に寄付したいとのだと言う。」その土地は決して良い土地でもなく、米軍から厩舎であり、いろいろな紐がからまっていますが、シズ子先生と夫の正登先生は、パウラスの援助を受けて事業を始めます。その後も多くの助けを借りて苦しい園経営をして子どもたちを養育して来ました。新米の牧師に口酸っぱく「どんな牧師でも良い。子どもたちに神様を話してくださる牧師が欲しかった」と後日、言われました。まあ「どんな牧師でもか」と苦笑いをしながら、この人は本当に神の言葉を預かり、語る牧師が欲しかったのだと実感しました。モード・パウラスの自伝によれば、シズ子先生は芸者置屋に売れるところをモード・パウラスに買われ、助けられ、育てられ、賢い先生は、東京の実践女子学校に行かされ、九州女学院の国語の先生となりました。

お金があればなんでも出来るかもしれないが、しかし逆になれば無用な人間として物のように社会の片隅においやられて芸者置き場に売られていくしかなかった。だから、お金がどんな力があり、必要なものであり、人生そのものを決定していくかということを本当に知っていた人だったと思います。

しかし、先生は、ルターがいうことを知っていたのです。

富は神が人間に与える地上における最も僅かの物、小さき贈り物である。富は神のみ言に比べてどれほど価値のあるものだろうか。いや、身体や美しさの賜物と比べればものの数ではあるまい。精神の賜物にも比べられないではないか。にもかかわらず人は「富が最高の財であるかのように」振舞うのである。ところが「富の」内容、形式、原因、目的は何の役にも立たない。だからわたしたちの主は一般的に富を粗野な口バ(愚か者)に与えたのである。口バにはその他のものは何も与えられなかった。

孤児となり、あるいは親から離されたこどもたちは、卒園すると人生を一人で切り開いていかななくてはいけなくなります。こ

のとき、世の一番見える力、富ということが人生を切り開いていくことでしょう。しかし、それはまたきつと自分を裏切るものであり、子どもたちが倒れたとき、あなたに何もなくても、あなたを裏切らない本当の人生のパートナー、神さま、イエスさまを見出して生きていくことこそ真実な人生があるということ。を腹の底から信念をもって子供たちに言い切れる人生を先生が生きておられたから「どんな牧師でも良い、子どもたちに神様を話してくださる牧師が欲しかった」という言葉になったのだと思います。コヘレトは、言います。1:2 伝道者は言う、空の空、空の空、いっさいは空である。1:3 日の下で人が労するすべての労苦は、その身になんの益があるか。預言者アモス「見よ、その日が来ればと 主なる神は言われる。わたしは大地に飢えを送る。それはパンに飢えることでもなく 水に渴くことでもなく 主の言葉を聞くことのできぬ飢えと渇きだ。」と預言しています。イエスさまが、「自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者はこのとおりだ。」という神の前に豊かになるとは、シズ子先生のように人生を豊かに輝いて生き、誰がなんと言おうと「どんな牧師でも良い、子どもたちに神様を話してくださる牧師が欲しい」と主の言葉の大切さを言い切る、求める者こそ、世は去り、世はきたる。しかし地は永遠に変らない。1:4 神の救いの真実を生きるものではないでしょうか。「自分の持ち物を売り払って施しなさい。擦り切れることのない財布を作り、尽きることのない富を天に積みなさい。そこは、盗人も近寄らず、虫も食い荒らさない。あなたがたの富のあるところに、あなたがたの心もあるのだ。ルカ 12:33-34」。金と権力が全てを動かすという豊かさを求める現代世界にあって、み言葉によって豊かに生かされている私たちは「**神の前に豊かになる者**」、本当の空なるもの向こうに神の言葉の豊かさが私たちにあります。森司祭は「わたしたちの人生の果てに、父なる神が待っていておいでになる。人生は神との出会いのための準備であるという自覚をもって生きている人こそ、真の賢者といえるのです」今日のみ言葉を結んでいます。

牧師室の小窓からのぞいてみると



ブラジル日系社会は、日本が敗戦後、大混乱が起った。「勝ち組、負け組」と日系社会を二分化していった。戦争は日本が勝ったのだと信じた人が多くいて、臣道連盟を結成し、戦争は負けたという認識派という人をテロで殺害するまでになった。多くの方が亡くなった。ハッカ、生糸を作る養蚕業は敵性行為として、これを破壊する行為までおよんだ。日系新聞もやはり二分化して、混乱をさらに混乱させていった。ブラジルでは「勝ち組、負け組」ということがあったことを私はまったく知らなかった。

日本だけで戦争の悲劇があったのではなく、戦争が終わってさえも同じ日本人が意味もない殺しをしていたのは言葉で言い表せない暗さ、闇、悲しみがある。戦争、これほど人を不幸にするものはない。勝ち組で、人の目を避けている老牧師の家を訪ねた帰り振り返りながら、この人はどんな気持ちで今いるのだろうかと思いの深さに狼狽えた。こんなところまで来て、第二次大戦の後遺症をみるとは思いもしなかった。戦争は、どんな戦争でも人を不幸にするものだともた身に刻んだ出来事だった。

園長・瞑想？迷走記



大相撲名古屋場所も終わり、最良のお相撲さんが休場でまったく見なかった。私が好きな相撲の場面は、呼び出しの土俵を掃く場面である。力士の勝負の土俵を綺麗にして整える、きりっと身の引き締まる場面である。

そんなことで、園庭を園児の土俵とするなら、ここは、園児の勝負場所、勝負の前に掃き清めなければならいと思い、呼び出しさんのように綺麗に清めることは出来ないが、早朝から園庭を掃いている。園児が来て、外遊びをするなら、掃き清めた綺麗な庭は、一瞬にして元の木阿弥になる。今日も園児らは十分に勝負できただろうか

こんな気持ちで、園庭を園児の土俵と思って、今日も掃き清めることが園長の仕事だと思っている。

日毎の糧

聖書：人は永遠に生きようか。墓穴（はかあな）を見ずにすむであろうか。人が見ることは、知恵ある者も死に、無知な者、愚かな者と共に滅び、財宝を他人に遺さねばならないということ。自分の名を付けた地所（じしょ）を持っていても、その土の底だけが彼らのとこしえの家、代々に、彼らが住まう所。人間は栄華のうちにとどまることはできない。

詩編49：10、11



ルターの言葉から

神のことばが語られるたびに、神に対して、喜ばしく開かれ
た、揺るぎない良心が造られる。ガラテヤ書大講解

『ルターの言葉 信仰と思索のために』W.シュバルン編 湯川郁子訳 教文館)

人間は栄華のうちにとどまることはできない。

この詩編は、教訓詩である。前半、後半は「人間は栄華のうちにとどまることはできない。屠られる獣に等しい。」（13節、21節）と結ばれる。人間は、いつまで栄華のうちにな
い、そして、人間は獣に等しいという。これがこの詩編の重点
である。また死である。そして死によって降りゆくところは一
様に地下であり、陰府である。この重点から、人生は虚しいと
いうことを意味している。そして、この詩編は、コヘレトの言
葉と響きあう。

「死が財力や富と言う社会的価値を無意味化してしまうことを
知る本詩の詠い手は、おそらく、このようなコヘレトの思想
に触れている。だが、本詩の勧めは、財力や富によって栄える
者をおそれるな、という点に集中する。それは、いうまでもな
く、自らの富や力に信頼して生きることの愚かさの教えてに通
じてゆく筈である。『人を惑わす財産を頼みとするな。いざと
いうとき、何の役にも立たない。シラ書5：8』」①

今の時代こそ、詩篇の言葉に聞く時ではないだろうか。

① 詩編の思想と信仰Ⅱ 月本照男 新教出版

祈り：財力や富によって栄える現実に打ち負かされることなくあ
なたの愛に生きていくことが出来ますように。



私たちキリスト者にとって、四国お遍路のようなものを「巡礼」と呼ぶ。サンチアゴ巡礼、エルサレム巡礼が有名である。サンチアゴ巡礼については、NHK のドキュメント番組は秀逸である。

「四国遍路 辰濃和男 岩波新書」の著者が、深呼吸は、大切なことは吸うことより吐くことだと、そして、「お遍路は『人生の深呼吸』なのだ」いう。さらに「『捨てる』という動詞は奥が深い。自分の生き方に向き合うとき、この動詞がどれほどすばらしい働きを示してくれるかを教えてくれたのも、へんろ道だった。」

これは、「巡礼」、とくにサンチアゴ巡礼は、色々な人生を背負ってきた人が、サンチアゴを目指して黙々、歩くのは、自分と向き合い、己を棄て去るように導きかれ、キリストと向かい合う旅である。そういう意味で、お遍路と巡礼はどこかで響き合うのではないだろうか。

「世界遺産巡礼の道～『長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産』～巡る 長崎県文化振興・世界遺産課」の日本の巡礼としては、一考かもしれない。(5コース)



時代の大きな変化の中で、今の時代こそ自分と向かい合わなければならないときであり、キリストと向かい合って道を示される巡礼の旅に出ていくときだと思う。

(甘木日記)土) 暑く、花も水を待っているはずと早朝、日善幼稚園の花に水をやって甘木教会へ。日) 礼拝後、幼稚園の掃除、その後、そうめんと一緒に昼食。ペカンの木の花の剪定をしていただく。月) 研修、職員のお子さんの病気で、職員が足らなくなつて家内に補助で来てもらう。火) 気温 39 度、流石に外には出られない。今日も家内に助けられる。幼稚園の台所を片付けている。水) 大学病院で定期検査。なかなかはっきりしないが任せるしかない。幼稚園に帰り園児が最後に帰るのを見て帰宅。木) 松崎保育園で礼拝。午後は甘木教会へ。金) 主日の準備。

おまけ・牧師のぐち（続日記）牧師だって神さまの前でぐちります。
ぐちらない聖人（牧師）もいます。



土）5時にメールチェック。体力が落ちて心配していた先生から月曜日からの研修に行かれるとあり。充実した研修になりますように。健康検査で注意と言われていた他の職員に早く病院に行くように言っていたが、帰ってきたメールは私にはのんびりすぎる返答に私は感じた。大

病をし、数年間、闘病生活をした私は、病気がどんなに苦しいことであり、誰にも体験して欲しくなかったのので、すぐに再検査をするように伝える。早期発見早期治療、健康が一番。何でもないことを強く祈る。ドラッグストアで政府備蓄米を初めて見る。これで良いのだろうか。今、日本は根本的に全ての分野で「これで良いのか」と問われているように思う。日）礼拝後にみんなで幼稚園の掃除をすることにした。休園中だから人の息を入れたかった。掃除も終わり、昼食となり、そうめん。庭



でとった薬味の大葉、お茶はドクダミ茶と。幼稚園の象徴のペカンの木が隣の駐車場まで枝がはっているの、信徒さんが木に登り剪定。大きな枝は登り易い。一度、登ってみたいとなった。小さい時はどこまで高い木に登れたのだが、あれは夢か。「ペカンの木にのぼったよ 福音館」の本が読みたくなった。信徒さんとの一緒に楽しい時間。月）夏の預かり保育だが、職員が研修に出たり、お子さんの病気で休んだりして、家内に補助要員として来てもらおう。助かった。火）今日は39度。今日も家内に来てもらい、台所の掃除、整理をしてもらう。子どもたちはプール遊びなどをして元気に過ごす。本2冊を購入。10,560円。花につく毛虫を取っていると通りかかった小学生がかわいそうだと言う。確かに。花を取るか、



毛虫の命を取るか。こんな気持ちにさせられ、微笑んでしまい、命を考えることを教えられ嬉しくなる。水）大学病院で定期検査。血液、CT造



影剤検査など。幼稚園に戻り、最後に帰る園児を見届けて、帰宅。欲しい本が絶版、古本を長男に頼む。木）松崎保育園、甘木教会へ行く前に掃除に日善幼稚園へ。隣家の百日紅の花が真夏の青空に映えて美しい。移動に車を出してくださり助かる。金）今週も多くの人に助けられてここまで来られたと手を合わせる。